

## 第四節 弥生時代

原始時代の最後の時期、即ち縄文時代に続く時代に弥生時代と名づけられた時代がある。この弥生時代は生活・文化の上で歴史時代への夜明けの時期とでもいえる時代であり、既述の縄文時代が土器、石器を利用し、自然の食料を採集して生活した時代であったのに比して著しい変化を見せた時代である。その主なるものは先ず第一に稲の栽培が始まったこと、即ち自然物の採集の段階から飛躍的に前進し、農耕による生活が始められたことである。この農耕生活については、縄文時代に既にそのきざしがあったのではないかとする説もあるが、稲の栽培が明らかにされたのは弥生時代である。第二は生活用具のうち主要な道具である石器に代って、銅器・鉄器が入って来たことである。殊に鉄器はその性質上石器よりはるかに優れており、弥生時代後期には石器の出土が少なくなってくる。

昭和四十七年八月新聞、テレビ等の報道機関は、中国に於ける古墳発掘について驚くべき事実を知らせた。それは湖南省長沙市で、前漢時代に長沙王に封ぜられた**軟侯**の室の墓で〔紀元前一八〇年〕、この墓から発掘された出土品は女性の屍体、棺、絹織物、漆器、木竹器、陶器などでその殆んどが完全な状態であると云い、女性の屍体については五十才前後で腐乱せず、指で体の一部を押すと元の状態に戻る弾力が残っていた。今より、約二、一〇〇年も前の屍体が腐りもせず現代人の眼の前に姿を現わす保存のよさ、数々の副葬品が示す高度の技術や文化程度にはまったく驚嘆する。

又、昭和四十九年九月には、先の墳墓に隣接する墓の発掘で絹地に墨書した長大な「帛書」が出土したことが報道された〔十万字〕。

これは当時の中国の文化水準の高さを示すものであるが、同じ頃の日本の状態はどうか。この頃は歴史の曙の時代で、「弥生時代」前期に当る。この驚くべき中国の高度な文化は一度に日本に押しよせては来ず、弥生文化発生の地と言われる九州方面に、南朝鮮との関わりについて近似する遺物が見られる〔『日本の考古学』弥生編〕。弥生文化の伝播は西方地区から徐々に中国、近畿、東海、関東、東北へと進み、東北地方の弥生文化の初期は、日本全体の弥生式文化の中期に当ると云われている。したがって東北地方における弥生式土器は、縄文式土器の伝統が強く残っていて、全国的な時期区分での弥生式文化前期のものは波及していないとみられている。当地方としては遺物は皆無に近いのであるが、弥生時代としての一般的なことについて触れておきたい。

## 1 農 耕 具

弥生文化の特徴として農耕・稲作をあげたのであるが、当然これに必要な農具が発達したわけである。農耕にとってもっとも必要なものは、くわとすきである。くわ及びすきの形は今日のものに似ているが、刃先まで木製で、材質はアカガシ、イチイガシ、シラカシなどが用いられた。くわには平ぐわ、またぐわがある。その他の農具では、

ふぐし：：先にへら形の刃をつけた簡単な掘棒。

フォーク形木器：：今日のものと同様で木製。

えぶり：：水田の高低をならす道具。

大足：：苗代や本田に青草や堆肥を埋めこむ。

田下駄：・稻刈などにはく。

田舟：・運搬用具（苗、稻、土、堆肥を運ぶ）。

石庖丁：・中国北部、朝鮮から我が国まで分布する東アジア新石器時代文化を特徴づける磨製石器である。稻穂を摘む時に用いる。

鎌：・鉄製で九州方面に多い。石鎌も見られる。

## 2 石器、紡織具、土器、青銅器

縄文時代に続く時代であるだけに、縄文時代に用いられた各種の石器が使用されている。鉄器が使用されるようになってからは、其の数が減少している。石斧などの場合は用途に応じて効果的に改良される。石斧・石鏃・石庖丁・石鎌・環状石斧・石錘〔おもり〕・石錐・石槍等が使用された。

縄文時代の土器に布目の圧痕が発見され、わが国の機織は、特に九州では縄文時代晩期に存在したとされるが、弥生時代になると紡織具が発明され、広く機織が行なわれたことが知られる。繊維には草皮系と樹皮系があり、草皮系には苧麻からむし・蓴麻いちくさ・大麻たいま・葛くず・イチビなどがあり、樹皮系ではカジノキ・楮・藤・オヒョー・シナノキなどがある。

生活用具として欠かせないものに土器と木器がある。土器は縄文時代から主要な生活用具であって、壺・甕・鉢・高坏たかつきなどがある。土器は時期によって又地域によって、違いが認められる。

木器は性質上腐敗し易いので、発掘されることは珍しい。縄文時代にも既に使用されていたという。用途は先

に述べた農耕具の外は、什器である。

鉄器と共に青銅器を使用したのが弥生時代の大きな特徴の一つとされ、矛・劍ほこなどがあり、特に銅鐸が有名である。

### 3 埋葬と祭祀

この時代の死者を葬る形は縄文時代からの共通様式も認められるが、時期や地域によって差が見られる。その墳墓形式には甕棺墓、土くわ墓、箱式石棺墓、支石墓、配石墓、木棺墓などがあつて、血縁的共同体を基礎とした共同墓地である。

副葬品は多く、青銅器の鏡・矛ほこ・戈ほこ・釧うでわ・鋤先・鍬かま。鉄器の刀・劍・戈・矛・釧・鏃。玉類では璧たま・勾玉まがたま・管玉・丸玉・小玉・棗玉なつめ・釧。貝製品では腕輪・指輪・彫画貝製品・垂飾品・貝坏など、又、骨角器・石器・土器がある。

縄文時代の祭祀と信仰が自然崇拜を母胎としたものであり、採集経済に依存した狩猟漁撈生活の中から生み出されたものであつて、弥生時代になってから農耕稲作という画期的な変化に伴つて、質的に異つたものになつていったことは当然であろう。弥生時代の特異な存在と見られている銅鐸は祭祀・信仰的なものと考えられているが、関東以西から多く発見されており、東北地方からの出土は見られていない。

弥生時代の住居・集落については農耕・稲作の導入による変化として共同作業的なもの、収穫の保存貯蔵といつたようなもののために、それに対応した形態と構造が見られる〔米沢八幡原遺跡〕。

#### 4 白鷹町の弥生時代

東北地方の弥生時代は、日本全体から見ると中期がその始まりとされている。中国や朝鮮の大陸の影響を受けて九州地方から始まった弥生文化が、この東北地方まで及ぶには相当の時間を要したことになる。東北地方で米作りが始まったのは西日本より少くとも二、三百年後のことで、二、〇〇〇年ほど前のことである。山形県内に於ける弥生時代の遺跡は、現在まで三〇カ所余り見つかっている

〔赤塚長一郎「最上川中流部の初期弥生文化」山形県の考古と歴史〕所収

この時代の米作りは低湿地米作で、自然の流水を利用した低地で湿地帯を選ぶ。米作については土器につけられた籾痕・籾・焼米、水田耕作のための農具・藁束などの出土より明らかであるが、置賜盆地特に米沢、高畠方面では弥生時代の遺跡が発見され、昭和四十五年堂森遺跡では籾痕のある土器が出土しており、先述のごとく昭和四十九年より進められている八幡原遺跡調査でも弥生期の土<sup>□</sup>が発見された。

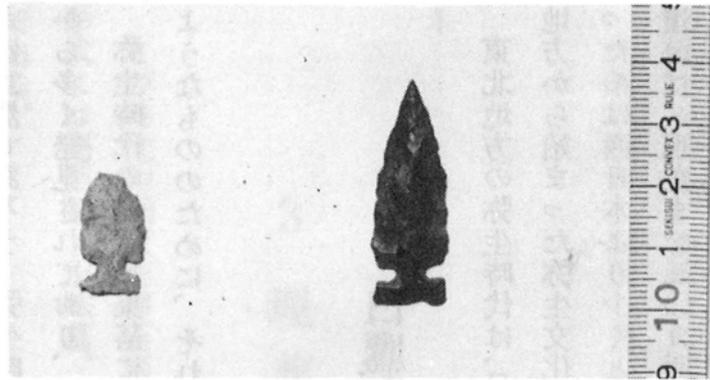
白鷹町に於ける弥生時代の痕跡は極めて乏しく、荒砥深山<sup>しんざん</sup>で天王山式と称せられる土器が発見されているにすぎない<sup>〔山形形蔵〕</sup>。天王山式土器は東北地方南部では最も新しいもので、西暦三世頃頃の弥生式土器である。県内

でこれと同じ型式の土器は高畠町観音岩洞穴、山形市隔間場岩陰、同市向山、朝日村越中山などで出土している。

これらの遺跡は、寒河江市石田を除いていずれも沖積低地より一段高い山地、或いは丘陵にあり、加藤稔氏<sup>〔山形大講学〕</sup>は次のような仮説を立てている。

「天王山式土器をもった集団は低湿地の桜井式土器をもったグループとは別に、縄文以来の山棲みの伝統を有し、焼畑による陸稲耕作と狩猟とを生業とした一団ではなかったか。彼等こそ東北古代の蝦夷の先祖ではあるま

いか。」<sup>〔山形新聞昭和四十六年一月十八日〕</sup>



第46図：アメリカ鋤（三浦文吉氏蔵）

今後白鷹町内の弥生時代遺跡の発見については、低湿地稲作と高地耕作とに留意することが肝要となる。本町で弥生時代の遺跡に關してもう一つ注意して見なければならぬのは、蚕桑地区金沢寺と三浦文吉氏〔<sup>荒</sup>砥〕所有のアメリカ鋤である。これは基部の両側に抉りのあるもので、この種の鋤は多く弥生期の遺跡から出土する。然るに、共にこのアメリカ石鋤は出所、年月が不明であり、且縄文時代の石器と混合されていて弥生期のものであると断定することは難しい。ただ金沢寺蔵の土器、石器はほとんど同寺附近から集められているもので、八幡遺跡、飯詰遺跡、中町西遺跡の何れかではないかと考え得る。若しこの推測が当っておればこれらの三遺跡の中に弥生期、或いはそれに近い遺跡が存在することになる。